

VI 花き

1 キク

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥	計	備考
—	N	15	10	25	・元肥には100日タイプの緩効性肥料等を使用する。 ・品種、作型によって追肥で調整する。
	P ₂ O ₅	15	10	25	
	K ₂ O	15	10	25	

2 カーネーション（ベンチ栽培）

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥	計	備考
冬切り（平坦地） 夏秋切り（中山間地、高冷地）	N	15	115	130	左記成分量を目安とし、年間10回程度に分施する。
	P ₂ O ₅	70	15	85	
	K ₂ O	10	130	140	

- 注 1) バーク堆肥、ピートモス等の有機物を20～30%（容積比）施用する。
 2) 微量元素、特にホウ素が不足することがあるので、元肥にホウ砂0.5kg/10aもしくは微量元素肥料を用いる。
 3) 床土のpHは6.0～6.5、ECは0.5～0.8mSを保つように施肥を行う。

3 バラ

周年の養液栽培（ロックウールかけ流し式）における養液の適正濃度

成分	pH	EC (mS/cm)	NO ₃ - N (me/L)	NH ₄ - N (me/L)	P (me/L)	K (me/L)	Ca (me/L)	Mg (me/L)	S (me/L)	Fe (ppm)	Mn (ppm)	Zn (ppm)	Cu (ppm)
培養液の 適正濃度	6.00	1.60	11.00	2.00	3.50	4.50	6.50	2.00	2.00	2.00	0.50	0.20	0.05

注) 表中の数値は愛知農試発表資料に基づく。

4 ストック

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥			計	備考
			1	2	3		
（平坦地） 年内切り 1・2月切り 3・4月切り	N	15	2	1	—	18	追肥は定植1ヶ月後、さらにその後1～1.5ヶ月後、生育を見ながら開花期まで肥効を持続させる。
	P ₂ O ₅	14	1	2	—	17	
	K ₂ O	15	1	2	—	18	
（高冷地） 10月切り 5・6月切り	N	20	4	3	3	30	
	P ₂ O ₅	15	5	5	5	30	
	K ₂ O	20	5	5	5	35	

- 注1) 完熟堆きゅう肥2t/10aを目安に施用する。
 2) 土壌のpHは6.0～6.5が適する。pHが低くなるとマンガン過剰症が発生する。

5 シュッコンカスミソウ

(kg/10a)

作型		成分	全量	備考
ハウス	(平坦地)	N	15~20	全量元肥を基本とし、発蕾後にNの肥効が切れるようにする。
	秋冬切り	P ₂ O ₅	15~20	
	季咲き	K ₂ O	15~20	
雨除け	(高冷地)	N	15~20	
	夏秋切り	P ₂ O ₅	15~20	
	季咲き	K ₂ O	15~20	

- 注 1) 完熟堆きゅう肥 2t/10a を目安に施用する。
 2) 活着直後に液肥で追肥を行うと初期生育促進に有効である。
 3) 据置株で初夏に切る場合は、通常追肥は不要である。

6 トルコギキョウ

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥	計	備考
—	N	10	5	15	
	P ₂ O ₅	10	5	15	
	K ₂ O	10	5	15	

7 シンテッポウユリ

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥		計	備考
			1	2		
露地	普通(暖地)	N	25	5	5	追肥は6月下旬(抽だい初期)、7月下旬とする。
		P ₂ O ₅	35	0	0	
		K ₂ O	22	5	5	

- 注 1) 定植1ヶ月前に完熟堆きゅう肥 3t/10a、土壌改良資材を散布耕起し、元肥も2週間前に施肥しておく。
 2) 土壌の適正 pH は 6.0 付近である。
 3) 100 日タイプの緩効性肥料等を用いて全量を元肥とすることもできる。

8 リンドウ

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥	計	備考	
露地	高冷地	N	15	5	20	元肥は萌芽前に、追肥は開花期 50~60 日に施肥する。
		P ₂ O ₅	20	0	20	
		K ₂ O	15	5	20	

- 注 1) 定植予定地は前年に深耕し、完熟堆きゅう肥 3~5t/10a を施用しておく。
 2) 過剰な施肥は切花品質に悪影響を及ぼし、株のいたみも増加するので注意する。
 3) 土壌の適正 pH は 5.0~5.5 である。

9 スイートピー

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥	計	備考
—	N	10	20	30	追肥は数回に分けて行う。
	P ₂ O ₅	10	20	30	
	K ₂ O	10	20	30	

注) 180 日タイプの緩効性肥料等を用いて全量を元肥とすることもできる。

10 ホオズキ

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥	計	備考
—	N	12	—	12	100 日タイプの緩効性肥料等および BM ヨウリンで施用
	P ₂ O ₅	19	—	19	
	K ₂ O	12	—	12	

11 ヤマジノギク

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥	計	備考
—	N	10～15	—	10～15	100 日タイプの緩効性肥料等および BM ヨウリンで施用
	P ₂ O ₅	15～17	—	15～17	
	K ₂ O	10～15	—	10～15	

12 アルストロメリア

(kg/10a)

作型	成分	元肥	追肥	計	備考
慣行	N	20	40	60	
	P ₂ O ₅	20	40	60	
	K ₂ O	20	40	60	
養液土耕	N	—	60	60	
	P ₂ O ₅	—	60	60	
	K ₂ O	—	60	60	

13 シュッコンスターチス

(kg/10a)

品種	成分	元肥	追肥	計	備考
BW (ブルーウエーブ)	N	10	15	25	
	P ₂ O ₅	10	15	25	
	K ₂ O	10	15	25	
BF100 (ブルーファンタジア 100)	N	15	15	30	
	P ₂ O ₅	15	15	30	
	K ₂ O	15	15	30	

14 シュッコンアスター

(kg/10a)

作型	成分	全量	備考
—	N P ₂ O ₅ K ₂ O	20 20 20	全量元肥施肥

注) 露地は施設より溶出期間の長いタイプを施用

15 肥効調節型肥料の利用

肥効調節型肥料は、作物が必要とする養分を必要な時期に、徐々に溶出、供給することができる。そのため、肥効調節型肥料を使用することによって、より環境に配慮した施肥を行うことができる。ただし、肥料の種類や温度条件などにより溶出特性（溶出する時期、期間など）が大きく異なることから、それらの特性を十分把握して施用する事が重要である。また、養分供給の効率が上がることから、速効性肥料を用いる場合に比べ 10～20%の減肥が基本となる。肥料を選ぶ際には、花きの生理特性に合わせて必要な溶出量が確保できるようなものを選定する。

16 有機物施用法

堆肥等有機物の施用法については、第2章を参照する。